

# 無住化前の兵庫県美方郡香美町小代区熱田集落にみられた葬送儀礼と四季の暮らし

—田渕徳左衛門氏の語りを中心に—

神戸夙川学院大学 観光文化学部 講師 河本 大地

神戸夙川学院大学 観光文化学部 高原 智子

## 【目次】

1. はじめに
2. 地域の概要
3. 葬送儀礼の手順と進行
4. 葬儀の食物からみる熱田
5. 葬式の約束事
6. 熱田の墓事情
7. ナマボトケの記述を巡って
8. 熱田の暮らし —春から秋—
9. 熱田の冬
10. 無住集落へ
11. おわりに

については河本, 2011a, bを参照)に大きな喪失が起きていることは、想像に難くない。そこで本稿では、山間の無住化した集落に着目し、そこで行われてきた葬送儀礼について、四季の暮らしの有様を交えて、記録に残すことを試みる。

研究対象地域は、兵庫県美方郡香美町小代(おじろ)区の中心部から南へ約10kmの山間に位置する無住集落・熱田である。熱田では、後述のように1968年に無住化が決定し、翌年、住民は小代区中心部に程近い野間谷地区に美方町(当時)が建設した越冬住宅に転居した。残された家々も積雪等により相次いで崩壊し、現在、熱田で母屋が原形をとどめているのは9戸中3戸のみとなっている(図1)。

## 1. はじめに

日本では第2次世界大戦後、大きく社会が変動してきた。それは、産業構造の変化や人口移動、家族関係の変化、生活様式のいわゆる近代化など、各所に顕著に見られる。その中で、人の死に関わる諸事象も大きく様変わりしてきた。日本における葬送儀礼の変化についてまとめた嶋根・玉川(2011)は、葬送儀礼の役務を提供する主体が地域や職場などの共同体から葬祭業者へと移行してきたこと、葬祭産業という新たなサービス産業の領域が生み出されてきたことなどを指摘している。

こうした中、葬送儀礼の地域多様性(この概念



図1 熱田の田渕徳左衛門氏旧宅  
(2009年5月、河本撮影)

美方町文化財審議委員会（1982）によると、現在の香美町小代区（旧美方町と同域）で火葬が一般化したのは1963年からである。しかし熱田ではその山深い環境ゆえに火葬が普及せず、無住化するまで土葬のみの葬儀形態が保たれていた。

この熱田の元住民の中で、現在コミュニケーションが十分に可能なのは、1929年生まれの田渕徳佐衛門氏（図2）のみである。氏は熱田で生まれ、40歳まで熱田で暮らし、その後も農林業や祭、墓参等のために熱田に通い続けてきた。

本稿では、田渕氏の経験談を交えながら、人生最後の葬祭儀礼である「葬儀」を軸に、熱田における四季の暮らし、無住化への流れについてまとめた。熱田を知る上でやさやかな資料となれば幸いである。



図2 田渕徳左衛門氏 近影（2011年5月、河本撮影）

## 2. 地域の概要

香美町小代区は、兵庫県但馬地方の北西部に位置し、北から東は兵庫県美方郡香美町村岡区、南は兵庫県養父市、西は鳥取県八頭郡若桜町・兵庫県美方郡新温泉町に接している。小代区の範囲はおよそ東西7km・南北14kmであり、周囲を標高1,000m級の鉢伏山・赤倉山・仏ノ尾・青ヶ丸山などに囲まれている。小代区は南から北に向かって

矢田川が流れており、全域がその源流域である。熱田集落はその小代谷最奥部の緩斜面に位置している。

美方町史編纂委員会（1980）によると、熱田という地名の由来は以下の通りである。尾州（尾張国）熱田の大宮司・藤原秀範の二男次郎範秀が逃亡の身となり、田野入道と名を変えて信濃国筑摩郡田野村に潜伏した。その後さらに奥深い但馬国小代谷へと移動し、土地を開拓永住したので、この地を熱田と呼ぶようになったという。つまり、現在の愛知県名古屋市にある熱田神宮と深い関係がある。

熱田は、標高660～680mの高地に位置している。大字は新屋地区の一部であるが、その中の新屋集落に熱田神社が存在することからも伺えるように、熱田集落はより長い歴史を持つ。人々が熱田から新屋に流れた理由は、①天文9年（1540年）の山崩れにより村がほぼ埋没し、助かった者の一部が新屋に移動した（美方町史編纂委員会編、1980）、②熱田は狭いので新屋に土地を求めた（美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編、1984）のいずれかであると考えられているが定かではない。いずれにせよ、新屋は熱田の人々が分離・移動してできた集落であることは確かである。

いわば隠れ里のような形で始まった熱田では、1969年に無住集落となるわずか7年前まで、関西電力からの電力供給がなされていなかった。1956年時点では熱田は完全な無電燈農家集落であり、住民はランプとカンテラに頼る日々が続いていた（美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編、1984）。関西電力から電力供給が行われるようになったのは昭和37年（1962年）のことで、美方町史編纂委員会（1980）には「2月6日 熱田備地区に関西電力導入熱田分校にも電灯がついた」と記されている。ただし熱田の住民だった小椋勝元氏は、1953年から10年間に渡って水力に

よる自家発電を試み不安定ながらも電力を得ていたというから（美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編、1984）、全くの無電燈状態だったとすることは誤りであろう。美方町史編纂委員会（1980）にはこの自家発電について、「1954年10月6日 熱田備地区に簡易発電所完工式あり」と記されている。

道路の整備が始まったのは1949年である。それ以前、熱田から秋岡に出るには岩盤にはしごをかけて上らなければならない箇所があり、人1人歩けるだけの幅では生活の糧である牛を売りにいくことも不可能だった。小椋氏の「熱田の村から小代までは名ばかりの県道で、犬道であった。これの改修を町や浜坂土木に陳情したが補助金は少なく『牛の角にはえがたかった』程であった。村の人総出で苦勞して独自で建設していった」（但馬学研究会、2012）という言葉に当時の状況を垣間見ることができる。

さて、このように山深い立地により、熱田では長く土葬の習慣が守られてきた。小代で火葬の習慣が一般化したのは1963年からであるが（美方町文化財審議委員会、1982）、熱田では1969年の無住化に至るまで土葬が常であった。当然ながら葬祭業者が入る余地はなく、住民の協力によってほぼ全ての工程が行われていた。その土地で生まれ生きて人間が、土地の人間の手によって、その地に埋葬される。無論これは熱田に限った話ではないが、こうして葬送儀礼に触れることは、暮らしの最も深い部分を知ることであるとも言えよう。次章では、葬送儀礼に登場するいくつかの要素から、当時の熱田の姿を探っていききたい。

### 3. 葬送儀礼の手順と進行

前章でも述べたように、小代で火葬の習慣が一般化したのは1963年からであるとされている。比較的小代区中心部に近い貫田地区に住む男性（75歳）は、「土葬をしたのは祖父母の代までだった。

このあたりはよく石が出るから、穴掘りが大変だった。親の葬式の時はもう湯村（現在の新温泉町湯）の火葬場だった」と語った。この発言からも、当時の小代が土葬から火葬に移り変わる過渡期であったことがうかがえる。なお、小代で一般的に行われていた葬送の手順と進行については、美方町文化財審議委員会（1982）所収の「死亡後の仕事」から多数引用させていただいた。熱田特有の工程をそこに追加し、死亡から葬式までの流れを確認していきたい。

#### ①臨終と死亡

医師が呼ばれ、近親者に危篤を知らせる使いの者を走らせる。このとき、必ず1人でなく2人で行かねばならない。田渕氏の祖父・祖母の年代までは、いまわの際に耳元や家の外に向かって名前を叫ぶ「タマヨビ」が行われていたとのことだが、話に聞いただけで実際に目にしたことはないという。臨終が近付くと湿らせたガーゼや筆で唇を濡らし、末期の水をとらせる。米（食糧）の準備は始まり、早い家ではこの時点で大工や桶屋に棺桶の注文を行う場合もあった。熱田では昭和初期まで桶を使っており、やがて棺型になったという。元気な男が最寄りの秋岡地区まで出て行き、桶を担いで帰ってきていた。

#### ②身まつべ

息を引き取ると使いの者が親戚縁者・寺・医師へ死亡を知らせにゆく。役場からの埋葬許可を得るには医師の死亡診断書が必須であるため、いち早く連絡が行われたようである。この使いも必ず1人ではなく2人である。平行して血縁の濃い者か家族による湯灌が行われ、身支度が整えられる。湯灌に携わるのは基本的に女性であるが、必ず1人は男性が混ざらなくてはならないとの決まりがあった。菘（むしろ）や桐油紙を敷いて行うこともあったが、亡くなった時のまま布団の上で行うほうが多かったとのことである。遺体の脚は、桶

に納めるとき都合がよいように首側に強く引きよせ、帯で体に縛り付けておく。ここまでの工程は硬直がはじまるまえに、迅速にせねばならない。服は右前に着せ、襦袢・手甲・足袋を履かせた。何を羽織らせるかは家によって様々で、合わせ1枚と簡素なところもあれば心づくしによい着物を着せる家もあった。亡者は北枕に寝かせ、線香・団子・箸を突き立てた一合飯を供える。棺桶が届いたら納棺を行い、鉦や鎌など刃物を乗せて祭壇に安置する。

### ③通夜と葬式の準備

集落の者が集まり、男女に分かれて手伝いながら葬式の準備を始める。女性は主に炊事を担当し、餅について祭壇に供えたり、大量の握り飯と煮物を作って食卓に出したりする。この握り飯は塩だけのものと、塩に黄な粉をまぶしつけたものとの2色にする。男性と集落の役員は葬式に必要な葬式用具の手入れや必要品を調べ、祭壇に飾りつけを行う。これらは熱田全体でひとつ用意されており、葬儀が出ると貸し出されていた。夜になると枕念仏をあげたり、酒を飲みながら食事をしたりして亡者を弔う。血縁の者は亡者の室に寝て、線香や松明が消えぬように交代しながら守りをする。

### ④葬式当日

埋葬のための穴掘りが行われる。穴掘りを「ヤマに行く」と表現する地域もあるというが、熱田では特別な言い方はされなかった。穴を掘っている最中は、夏冬を問わず焚火がたかれた。人夫には食事として茶・煮しめ・握り飯（塩と黄な粉）等が用意される。穴掘りが終わると自宅で僧侶による読経がはじまり、宗派に応じた引導作法・告別作法が行われる。棺桶を釘付けにし、担棒に固定して墓へ向かう（この葬礼を「ソウレン」と呼ぶ）。そして墓穴に下ろし、血縁が濃い者から順に土をかけていく。最後に人夫が完全に埋めて始末する。手前に飯、団子、餅を乗せた膳を供え、上

には獣に掘り返されぬように、藁をかぶせた上から茅葺きの小さな小屋を建てる。

以上が死亡から葬式に至る大まかな流れである。後に1週間ごとの速夜を7度繰り返す、四十九日を迎えると忌明けとなってようやくひと区切りとなる。次章からは、葬儀に使用される食物やものに付随する約束ごとを取り上げ、その背景を探る。

## 4. 葬儀の食物からみる熱田

### 4-1 熱田集落における供物の特徴

死者への供物として日本の多くの地域に登場するものが、一合飯である。炊き立ての米を飯茶碗にこんもりと盛り上げて箸を一本突き立てたもので、枕飯ともいう。熱田ではこの一合飯と餅、団子がセットとなっていた。団子は枕飯同様、枕団子と呼ばれた。白一色で、餅と同じくこれといった味付けはなかった。貫田地区では着色料を使用して青に染め上げ、白青二色を取り合わせて盛った家もあったというが、熱田では行われなかった。月見団子のように積み上げて香炉とともに亡者の前に供されていた。

熱田において特筆すべきは餅の存在であろう。田淵氏によれば、「お団子と餅はしますね。葬式のと、四十九日の餅とはね。（女の仕事だったので）いつつくのかは知らんけど。葬式出るときにはもうできとったんじゃないかな、墓にもっていかんやならんから。（人が亡くなったら）すぐつきますね」とのことで、餅つきは死亡したら即行すべき重要な仕事の一つだったと思われる。しかし、美方町文化財審議委員会（1982）では、速夜から四十九日の間に行われる餅つきについて言及されているのみである。また前述した貫田地区の男性も、「一合飯と団子のみで餅はなかった」と記憶していることから、葬式以前の餅つきは小代において一般的なものではなかった可能性がある。

ただし、第2次世界大戦以前に東北地方から九州地方まで広く行われていた習俗として「耳塞ぎ」（ミミフタギとも）が存在する。これは同年生ま

れの者が死亡した場合に耳を塞いで凶報を聞かないようにし、死者に引かれてしまうことを防ごうとするものだが、耳を塞ぐ際に団子や餅が使われていたとされる。また「引っ張り餅」といって、野辺送りの際に近親者が後ろ手に餅を引きあつた後あぶって食べるという習慣も、東北から奈良近辺まで広く行われていた。特に後者では葬式の朝に餅をつくことも多かったようであるから、熱田で行われていた特別な習俗というよりも、戦争を境に失われた習俗が熱田では生き残っていたというほうが正しいかもしれない。

#### 4-2 熱田米事情

一合飯、餅、団子、この3点に共通するものが米である。熱田における正確な米収穫量は定かではないが、1907年生まれの小椋氏は自分の体験談をこう語る。

「米のめし食うのは、正月か、盆か、祝か、何か死んだかないと殆んどない。「熱田中に米が足らなんだので、粟めしを食ったり、稗めし食ったりしとっても、まんだ米が足らなんだ」(美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編、1984)。

雑穀を混ぜて食いつないでも足りなくなるようなことになれば「こまさんげ(こまさん宅)」(現在の香美町村岡区)まで買い出しにいったという。一方、1929年生まれの田淵氏は米についてこのような記憶を述べている。1968年の雪崩発生における炊き出しの思い出である。後述するが、この雪崩は熱田が無住化するきっかけのひとつとなった。

「まあ熱田ってところは米はいくらでもあるし鍋も大きな鍋だからって。70人からおりましたんでね。その人たちに、いずれにしてもお腹みんな(警察と消防隊、手伝いの人々)減つとるだで。そんでご飯炊いて握り飯だけしてね、皆で食べてもら

って。」

つまり1968年頃には各住民に十分行き渡るだけの米があったことになる。小椋氏の「その時分」がいつを指しているのかは明確ではないが、第2次世界大戦によって「食糧不足がはなはだしくなった」(美方町史編纂委員会編、1980)時期のことと仮定すると、約20年の間に熱田の米事情は一変したと言える。

美方町史編纂委員会(1980)の主要生産物統計によると、1943年から1947年にかけての平均産米数は約3,855石、1966年から1970年では約6,046石(1石=150kgで計算)となり、20年間で約1.5倍に増加したことがわかる。しかし熱田の人々にとって米は自家消費するものであり、収入源としては考えられていなかった。したがって自ら作った米の量がそのまま1年間食べられる米の量となる。熱田には、田淵氏いわく「蚕と牛と出稼ぎと、これしか収入源はまずなかった」(美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編、1984)のであり、人口の増加は村の食糧事情が苦しくなることにつながった。

「熱田はもう、中(熱田)だけでやってたから。あんまり人がいるのもかえっていいこととも言えんのです。勉強とか学問できる場所がないのが一番だけど、めしのこともあって、若いもんは早くから出稼ぎに行つたし、親戚を頼って(小代の中心部である)大谷やらへ下宿させられたりしりました。あとのほうになると若いもんはもうおらんし、年のよつた人ばかりだったけど。」(田淵)

出稼ぎは単に金を稼ぐだけでなく、集落内での食糧不足を防ぐ意味もあった。特に敗戦にあたる1945年は日本全体を冷夏が襲い、小代でも産米数が2,528石と前年の4,685石を大きく下回った。小代区の北東部、神水地区に住む毛戸智恵子氏は



当時のことをこう語る。

「終戦の時には、冷夏の為、餓死で、農家でも食べるものがなかったのです。米は今の半分位とれたでしょうか。肥料も無しで、米は作っても、米にして3石もない位で、子供がじょうにおると、冬中食べたらなくなり、この辺でも、1945年の餓死には、みんな青ぶくれたような顔をして、ようけ死にました。山の草や木の葉、食べられる葉は大抵みんな食べました」(美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編、1984)。

熱田もこの冷夏によって被害を受けた。田淵氏の家から餓死者は出ず、村でもはっきり飢えが原因で人が死亡した記憶はないというが(ただし栄養失調による病死等はこの限りではない)、戦争が引き起こした物資の欠乏に畳みかけての冷害は、葬送儀礼の簡略化を後押しした。死者を弔う気持ちはあれ、まず生きている人間の食のほうに切実であったからであろう。葬儀から米の姿が消えた。

「いやあ、餅つきなんてね、その時分はできなかったですね。うちの家からはおらんかったけど熱田には(戦争にとられた方は)たくさんおりますよ。その頃は白い米なんて食べられんですしね。葬式っていったら団子と飯と餅だったけど、白い米なんてないし、あったっても勿体のうて使えなかったでしょうけどね。せいぜい玄米だの干しておいた山菜だの出せる程度で、当時どの家もそうだったから珍しいことなかったと思うけど。とにかくみんな腹はへってましたねえ。」(田淵)

翌1926年の産米数は4,032石と例年並みに持ち直したが、この冷害が住民に過酷な1年を強いたことはいまでもない。熱田が戦争を越えて再び餅つきの習慣を取り戻した時、人々は(葬送儀礼の一部という形であっても)喜びを感じたのでは

ないだろうか。

それから20年の間、熱田では耕作地の減少が進んだ。住民の高齢化により、家から遠く便利の悪い田では米を作らないようになったのである。

小学校6年・中学校3年の義務教育が制定されたのは1947年のことだが、これも熱田の高齢化と人口減少に拍車をかけた。中学生になると小代の中心部近くにある小代中学校まで通わねばならないが、冬季は熱田からの登校が不可能になるため下宿を余儀なくされる。学校近くに寄宿舎が建設されたが、やはり高校に進学するとなると下宿は避けて通れない。それならばということで、子と一緒に熱田から引っ越したり、熱田以外の人と結婚して出ていったりする住民が現れはじめた。その結果、以前はどれだけあっても足りることのなかった米が、1968年には「熱田ってところは米はいくらでもあるし」と言われるようになったのである。耕作地の減少は人口の減少に比べて緩やかだったということだろうか。しかし今では、戦争を乗り越えた餅つき儀礼も、見ることができなくなってしまった。

#### 4-3 葬儀の食事

供物以外の、生きた人間に出される食事について述べる。熱田で決まって出されたのは、塩と黄な粉をまぶした握り飯だった。貫田地区および小長迫(こながたわ)集落(大谷地区の一部で、現在は無住)出身の男性各1名からも同じ内容を聞くことができたので、小代に広くみられる特徴のひとつと言えるかもしれない。葬式で出た食物は余っても自宅に持って帰ってはならないと言い伝えられてきたが、握り飯だけは持って帰る人も多く、みな喜んで食べたという。

「塩味でね。塩だけだけど昔の握り飯はおいしかった。どっかの家でその話したら、いやあ本当においしかったよなあって。ここら辺はだいたい丸ですね。まん丸。黄な粉をまぶしたりね。握り飯

の塩だけに黄な粉で、黄な粉は今はスーパーなんかも買えるけど、昔は自分達で育てよりましたから。」(田淵)

喪家では通夜から四十九日の忌明けを迎えるまで、一貫して精進料理が食された。煮物に使う出汁は昆布で、「だしじゃこも魚だから昔は使わなかった」という。茸ではシイタケにヒラタケ、その他にフキ・ワラビ・ゼンマイ等を干して保存しておき、煮物にして、季節の野菜と一緒に食卓に上げた。なお、この食事は手伝いの人々への簡単な“お礼”も兼ねており、他に金銭的あるいは物質的なお礼は存在しなかった。葬式の手伝いは、「生きておる限りは手伝いに行かにゃならん」相互扶助で成り立っていたのである。

現在の小代ではこの習慣も廃れつつあり、手伝いの人々や参列者には業者が配達してくれる弁当を注文してすませることが多いという。内容も精進ではなく、魚や肉が堂々と入っていることが普通になってきた。田淵氏によれば「当時は忌明けまでに生魚を食べることなんて想像もしなかった」そうで、忌明けを迎えてもすぐに口にするのはためられたという。四十九日の法要でようやく、ちくわや赤いカマボコなどの加工品ならば食べてよしとする程だった。

「だれが死んだ時やったやろ。誰か死んだ時に、村岡のどこかに行ったら忌明けの時に刺身を出してきて。隣にいた人が小代のほうではこういうことしますかい、って(尋ねてきたので)いやあしませんなって言ったら、うん、わしはこんなものは食べん、って言ってね。家の人があることなら持って帰ってっていったら、祝いのあるもんなら持って帰るけどこんなやつはわしゃあ持って帰らんって。長いこと先生しとったらしい、ちょっと変わった人でねえ。せっかく招待受けて呼ばれてきとった人だったんですけどね。今の人はなんのこともないだろうけど、どんちゃんとやります

けどね。昔はどこも精進料理だったから、年のよった人には嫌だったんでしょねえ。自分も刺身だの寿司だのってというのは思いもよらなかったから、えらい驚いた。」(田淵)

また、飲み物は茶と酒が出されたが、このときの酒はどぶろくでなく店で購入した清酒であった。特に高齢者が亡くなった際などは、葬式だけめでたいなあと話をしてながらたいそう酒を飲んだという。

## 5. 葬式の約束事

### 5-1 日取り

今でも葬儀の日程が友引と三隣亡にあたると、それぞれ葬儀が後に続くという理由で先延ばしする地域も多い。しかし熱田は比較的「そういうのを苦にしない」土地であったそうで、出棺を通常より遅い午後の3時程度にすれば、もう1日はおおよそ終わったようなものだからいいだろうと解釈し、ごく普通に葬式が行われていたという。土葬だから火葬場の日取りが悪くて休み、ということもないわけである。人が亡くなれば埋葬するまでは通夜を続けなくてはならず、通夜が続くと何かと費用がかさむ。だから友引に重なってもこうして理屈をつけて葬式を出してしまう。「熱田はみんな苦労した人ばかりだったから。金のない人間の合理的な考えかもしれませんな」と田淵氏は笑った。

### 5-2 演出された非日常

例え100歳の大往生を遂げた人がいたとしよう。皆めでたいなあと言いながら酒を酌み交わしていても、それは「長く生きた」ことがめでたいのであって「死んだ」ことがめでたいわけではない。死にはどうあっても負の力が付きまとう。ゆえに葬儀はあくまで非日常的なイベントとして演出され、そうそう繰り返されるものではないと人々に印象付ける必要性があった。

「(湯灌の時は) 必ず、縄帯をしましてね。それも普通じゃしないことを、こんなことがあってはならんことだでって、普通のことはしないってことで縄の帯でね。」(田淵)

人々は「いつもと違う」ことを工程に取り入れることで、一種の特別感を強調しようとしたのである。幼い頃、食事の際に茶碗に箸を突き立てて遊んで、親から注意を受けたことがある人は多いだろう。死者の食事である一合飯を想起させるからよくない等といわれるが、そもそも一合飯自体が日常から逸脱した印象を与えるためにつくられたものなのではないだろうか。

「その時(一合飯)には箸は竹と普通の木の箸。生きてる人間と同じことをしたらあかんということですけどね。普通だったら竹の箸は竹の箸、木の箸は木の箸ばかりだけど、その時は別々にしなくちゃとって一本ずつ持ってきて。うちではずっとそうしよりました。」「葬儀の時は1人では行きませんでしたね、必ずと言っていいほど。(どうして2人なのか) さあ……。とにかく、2人。別に何も出てくることもないと思うんだけど。」(田淵)

友引を苦しめない熱田でも、これらの習慣は固く守られていた。常光(2006)は、「一つ」がもつ異常・不安定・非日常性に対して「二つ」を正常・安定・日常性とする観念の存在を指摘している。1という数字は、日本文化においてあちら側、すなわち死者の世界につながるというのである。

常光はノックが2回でなく1回しかされなかったときの薄気味わるい感覚を例に挙げ、さらに全国各地に点在する「一声呼び」の妖怪(返事したら命をとられる、また一声だけでなく二声叫べば助かるなどのバリエーションがある)と合わせて、1回だけなにかを行うことは日常的な暗黙の

了解をやぶることであると推測する。また柳田(1977)は、「黄昏に途を行く者が、互いに声を掛けるのは並の礼儀のみで無かった。いわば自分が化けものでないことを、証明する監察も同然であった。佐賀地方の古風な人たちは、人を呼ぶときは必ずモシモシと言って、モシとただ一言いうだけでは、相手も答えをしてくれなかった。狐じゃないかと疑われたためである」と述べたことと合わせて、「1か2か」という違いは「人でないものか人か」という対立的な関係へ置換してゆくことも可能だろうと結論付けた。

熱田で以前行われていたタマヨビ儀礼に関して、田淵氏は「いまわの際の人に何度も話しかけたものではなかった。一度くらい呼んでそれでおしまいだったんじゃないかな」と述べている。常光に倣えば、あえて一度しか名を呼ばないということは、もう人として認めていないということになるだろう。つまりタマヨビとは「魂を呼び戻す」というよりも「あちら側に行ってしまった魂と生者を切り離す」別れの儀式としての意味合いから生まれた習俗であったと言えるのかもしれない。

## 6. 熱田の墓事情

小代区中央部に位置する貫田地区では、葬式における手伝いのひとつとして「墓石を探してくる」役目が存在したという。これは穴掘りを担当する男性陣の中で手分けして行われるもので、よい墓石は川の近くで探せと言われた。角が取れて平たくなつた石を見つけやすかつたためだろう。

それに対し熱田では、「よい自然石(じねんいし)が出なかつた」ためか、早い時期から墓石は外から買うものという認識が強かつた。特に秋岡地区の居望(いもう)から切り出されつた「居望石」は墓石に最適で、ある時期から終戦を過ぎるまでの墓石はほとんどが居望石でつくられたものだという。車や台車を使えるのは秋岡までだったため、棒に挟んで縄で縛り、ひとつひとつ担いで集落まで運んでいた。



墓石は年齢・死因を問わず購入されたが、例外もあった。「ひとりだけうちで死んだ妹で、3歳っちゅうのがあるんですけどね。昔はお地藏さんを建てとったんだけど、そこらへんの石だったみたいで欠けてきましてね。私が直して別のをしてやったんです」(田淵)。このように子どもの場合に限り手彫りの地藏を建てることも行われていた。

とはいえ「7年して地が固まるまでは」墓石を建てるができなかったため、形のよい小ぶりの石を拾ってきて仮の墓石とすることが普通であった。死者が出ると通夜から速夜・一周忌と費用がかさむこともあり、7年の間に墓石を用意すればよいというのは遺族にとっても気楽な決まりごとであった。

田淵家の墓地は、家屋敷地からやや北西の高台に位置する。ほぼ真南を向いて建てられた墓石の周囲を杉林が覆う、風通しのよい立地である。この高台付近は、熱田が無住化するまで、田淵家を含む3戸が墓地として使用していた。しかし現在確認できるのは田淵家の墓地と、その手前に並ぶ2体の地藏だけである(図3)。



図3 熱田の墓地 (2009年5月、河本撮影)

「あれ(地藏)は私の家の分じゃないで。うちの上に小屋がひとつあったんだけど。その家の人が建てたんですよ。それともう1軒、下に家がありましたでしょう。あれが上田という、佐坊(小

代区南部の地区名)から来た人でね。私のところに階段らしきものがちょっとあったでしょう、墓へあがる道へね。これの下り坂、右っかわのほうが上田というか。戦死した人が2人いらっしやるんだけど、それで大きな石碑もって上がってきたんですよ。」(田淵)

無住化してしばらく後、田淵家以外の2戸は熱田から先祖代々の墓を移転させた。土地と一体化している土葬形式の場合、墓を丸々持って行くことは不可能であるから、墓下の土を少し掘り返して新しい墓地に「再埋葬」することになる。田淵氏は墓を移動させる際に立ち会った真言宗僧侶とのやりとりをよく覚えているという。

「お墓をそのまま立てておくと、誰か来て拝んだり、花供えたりするかわからんし。そうすると今度はそのお墓の霊が拝んだ人についていくっちゃうんか、悪い口で言えば祟るっちゃうかするんだって。それでこういうふう(墓石を取り去るように)せえといたって。それで私はそのお坊さんに向かって文句言っただけでね。言いは悪いけど、あんたがたは私にいわせりゃプロだで。プロの人が拝んだら、本当はおしまいになるはずなのに。素人がちょっと線香たてたりしたから祟るなんてどういうことだって。そしたら向こうもよう言えん。いやー、熱田の墓は古い墓だから、しんどかったっていうですわ。しんどかったか知らんけど、そぎゃなあんたがたみたいな修行した人が拝んだのに、素人が行って花供えたら霊が戻ってくるなんてことがあるかいて。」(田淵)

僧侶はあくまで雇われの身であり、「その家の人が便利があるもんだで頼むって言われるのを、こっちだって嫌とは言えん」だけである。元住民にしても当然ながら、墓を軽視しているわけではない。墓参りという形で日常的に死者を弔うには、絶対的に近場の墓地が便利であろう。集落へ足を

運ぶことが容易でない現在、人々にとって墓の移転はやむを得ない選択であったに違いない。

しかし田淵氏は、墓を、無住化した集落と自分たちとをつなぐ最後のツールだと考えている。もはや盆や正月など限られた時にしか、熱田出身者が戻ってくることはない。それでも土地と墓がある限り、最低限の人の流れを保つことができる。最後の砦である墓の喪失は土地に固執する理由の喪失でもあり、本当の意味で熱田が人々に忘れられてしまうことを懸念しているのである。

## 7. ナマボトケの記述を巡って

「真宗の家ではナマボトケといって仏壇の近くに祭壇をつくり、山からとってきた花を三つ祭った。位牌は墓のみで家にはなく仏壇にある過去帳（位牌にあたるもの）にも死人の名は未だ記入されていない。祭壇の最中にある花が死人の依代であると考えられている。」

これは兵庫県教育委員会文化課編（1970）に見られるナマボトケの概要である。生き仏でなくナマボトケとは、聞き慣れない方が多いであろう。資料がほとんど入手できなかったため、聞き取りの際に田淵氏に直接うかがってみると、以下のような返答が得られた。なお田淵家は浄土真宗の檀家である。

「いやあ、真宗でナマボトケっていうのは聞いたことがありませんねえ。ナマボトケというのは、普通、まあ息が切れますわね。そしたらまあもうナマボトケなんですよ。例えば七七四十九日たたと本当の仏になれんというね。これは真言宗なんですよ。浄土真宗では即ボトケになってしまうというようなことをいうんだけど。熱田にも真言宗の人はいましたから、それで聞いたことはあるのかな。」

ナマボトケは真宗でなく、真言宗の儀式だった

ののだろうか。宗派の違い以外はほぼ報告書通りの工程を踏んでおり、祭壇に花を飾るという部分も共通していた。忌明けまではまだ死者は“そのあたりにふらふら”していて、四十九日の忌明けを迎えてはじめて本当の仏になれるのだという。

また、貫田地区の男性（真言宗檀家）はナマボトケに関してこう語った。

「人は四十九日たないと仏になれない、そういうことは聞かされました。死んでから忌明けまではまだ三途の川の手前で、家の軒下あたりにいるとかね。向こう側では裁判があって、親族が押手でやったり、線香をあげてやったりすると、それを栄養にしてあちら側まで行くんだそうです。ナマボトケとはその間のことでしょうかね。」

どうやらナマボトケとは、人でもなく仏でもない中間の状態を指すものであるらしい。兵庫県教育委員会文化課編（1970）では、小代を対象とした2集落、すなわち小長迫と熱田どちらについて述べられたか曖昧な点があり、ナマボトケの詳細も不明である。ひとまず今回は、聞き取りで得られた情報をもとに、「ナマボトケは真宗ではなく真言宗の概念ではないか？」と疑問を投げかけるだけにとどめたい。

## 8. 熱田の暮らし —春から秋—

ここまでは、葬送儀礼を軸に、熱田の人々の生活を垣間見てきた。葬式は集落の全住民を総動員した大きな非日常的仕事であるけれども、それ以外の日常的仕事の中で人々はどのように暮らしていたのだろうか。この項では田淵氏が語る「いつもの熱田」に美方町史編纂委員会（1980）等の引用を加えつつ、当時の暮らしがどのようなものだったのか考察する。

### 8-1 春

熱田はその山深さから雪どけが遅く、冬から春

の間は厳しい生活を送らねばならなかった。しかし小学校の新しい年度が始まると、ああ春が来たんだなという実感もわいてきたという。



図4 旧熱田分校の校舎と田渕徳左衛門氏  
(2011年5月、河本撮影)

小代村立熱田家庭教育所（1955年に美方町立小南小学校熱田分校と改称、1959年に図4の新校舎竣工）では、1人の教師が新屋から通勤し、6学年15人程度の生徒を一手に引き受けて勉強を教えていた。校舎は平屋建ての簡素なもので、教室が1つ、職員室兼特別教室が1つという程度のものであったから、子どもたちは全員同じ部屋で並んで勉強をした。違う学年が隣り合う中、こんなこともあったという。

「私2年生になったときに、横で3年4年が算数して見とった。掛け算ですね、 $3 \times 7 = 21$ 、 $3 \times 8$  といったようにやれるんだけど、逆になると言えんのですよ。一緒なんですけどね、理屈としたり。ごろが悪いからね。でも傍から見てるとわかるんですよ。一緒だがな、なんちゅうこと言っとったら、1年生や2年生は黙ってなさい、あんたら勉強済んだら出て行きなさいなんて叱られてね。教室から追い出されたことがあるんですけどね。小さい子のほうが上の勉強できたことがあったんです。」（田渕）

学校にはピアノはなく、小さなオルガンがひとつあるだけだった。「君が代」や「白地に赤く」と校歌を習った程度の記憶しかない。体操の授業もあつてないようなものだったが習字には熱心な先生で、新聞紙が真黒になるまで練習をさせられたという。

また春の楽しみのひとつに、冬は全く手に入らなかったおやつが食べられるようになることがあった。おやつといっても今でいう菓子類ではなく、天然の野イチゴである。「今はほとんどないですけど、おいしいイチゴがありました。橙色の下がりイチゴっていうのか、1本こうしゅつと出とって、ぶら下がってるイチゴがおいしかったですね。子どもは一生懸命になってそれを探しましたよ」と田渕氏が言うように、冬の間かき餅や干し芋を食べ続けた子どもたちにとっては、うれしい春の贈り物だった。

## 8-2 夏～秋

養蚕：夏は田植えと養蚕で非常に忙しかった。美方郡蚕業同業組合が結成されたのは1918年のことであるが、それ以前から養蚕は盛んであった。熱田は寒いので、蚕が病気にならず質のよい繭が取れると評判だった。実際に養蚕を行うのは5月の終わりから6月初めという短い期間だったが、その収入は「1戸の経済を保つのにすごく助かる」ものであり、熱田で蚕を買わない家はなかったという。

現在の熱田にはほとんど残っていないが、当時は大きな桑の木が何本もあった。熱田の気温では普通の桑は寒くて凍ってしまうこともあるため、特に背が高く丈夫な立ち木という桑を植えていた。もちろん桑の実子どもたちの大切なおやつであった。

約10日のあいだ全ての家は「蚕屋敷」と化し、田渕家でも8畳の間を4部屋、2階が使える時は2階にもびっしり蚕を並べて繭を採った。濡れた桑の葉を与えると蚕が腐ってしまうため、雨が降っ

でも困らぬように1日分余計に桑の葉を「茎貯め」しておく必要があったこともあり、家の中は蚕と桑の葉で足の踏み場もない状態であった。この時期ばかりは人よりも「蚕様」が優先で、布団を引く場もないため庭先で眠る家も多かった。桑の葉を採るのは子どもの仕事で、手が痛いのを我慢して茎をしごいていた。

できあがった繭は、蚕に中から食い破られないうちに、急いで籠に入れて大谷地区の製糸業者まで買ってもらいに行った。八鹿（現在の養父市）や和田山（現在の朝来市）にも多くの製糸会社があって、当時の女性にとっては主要な就職先だった。この養蚕が終わるころにはちょうど田植えも終わり、「お百姓さんの一番いい時期」であるつかの間の休息が訪れる。養蚕は終戦後も続いたが「熱田出合まで車に乗せても出られるって思った頃に駄目になった」というから、1949年前後には産業として成り立たなくなったものと思われる。

大麻栽培：春から夏にかけては大麻の栽培も盛んに行われた。大麻というと現代の日本では麻薬というイメージが強いが、布としての「麻」と基本的には同じものである。麻の成長は早く、種をまくと見る見るうちに3mほどの高さにまで生長する。皮と繊維を取り除いた茎部分はオガラといって真言宗の送り火・迎え火等によく使用されるが、熱田でも「オガラを束ねたのに梯子をつけて、盆があけた16日の朝に団子や花とともに小川へ流す」行事が行われていたようだ。

「大きな桶をぽこんとかぶせて下から釜で火を焚いて蒸してね。それを今度は皮をこうして取っていくんです。そしたらオガラが美しい（ものになる）。スカンポでよく乾くし分厚くなるから、昔は草屋根の下地に必要だったんですよ。1年に何回かあるくらいには結構作りよりましたねえ。それを全部紡いでね。テグスを引いてというけど、こういうふうによりながらね、合わせてね。足のと

こに引っ掛けといて、女の人の仕事ですけど。それを糸にして、冬の間は機で織っていくんですよ。そしたら春にはちゃんと商人が買いに来ると。」

（田渕）

桶は非常に大きいもので、天井よりも高かった。熱田にひとつある桶を皆で共有して使っていたが、どのあたりに置いていたかは思い出せないという。畑の隅に刈り残した大麻にはやがて小さな実がたくさんつくので、秋頃になったら手でしごいて集め、鍋で炒って食用にした。

「あれは、そばとかにふるっちゅうと非常に香ばしくておいしい。ただ、そのころからあんまりようけ食べると眠たなるでようけ食べんだでって言いよってね。うちの近所にもようけ生えてました。それがまた落ちて生えてね。それが終戦後だいで経ってから大麻を作られんということで（調査委員が）来た順にあれへんかあれへんか言うすけ、あれへんでなんのことやゆうたら、何言っとなんじやそこにあつたでって。まあしたらあかんちゅうこと無理にせんでもええだし、麻薬だので金にするような腹も全然ないだし、なくなりましたけどね。（終戦後10年くらいは）あつたでしょうね。皮がちょっと硬いで、荒皮を取ったらね、とっても香ばしかったですよ。」

麻と米の収穫が終われば、すぐ冬が待っている。

## 9. 熱田の冬

熱田の冬は長く陰しい。男性の大半は春まで出稼ぎに出してしまうため、村の留守を預かるのは女性と子ども・高齢者である。冬は牛と人間の出産が重なる時期でもあった。

「結局ねえ、妙なことにというか、冬、男の人は出稼ぎに出るんですよ、で、春帰ってくる。ということで妊娠する時期がだいたい決まっとる。3

月とか4月とかね、帰ってきて妊娠するということは、間が悪く2月とかに産むんですよ。悪い時なんだけども仕方ない。」

子どもが生まれるとなれば大ごとである。厳しい雪に降りこめられた集落で、人々は妊婦に栄養をつけさせるため知恵を絞った。田渕氏の母親は自らも出産経験が豊富だったためか、よく出産の手伝いに行っていた。どこそこの子どもが生まれそうだと聞けば、山に出かけて自然薯（冷えを取ると言われていた）を掘ってきて、焼いて妊婦に食べさせる。村の池には共同で黒いコイを飼っていたが、その生き血も精をつけるのによいとされていた。イタチが取りに来ないように木の箱で囲って大切にしていたという。

他に自家製の漢方薬として、フキやドクダミの根、ゲンノショウコ、オオバコなどを乾燥させて煎じた物をお腹の子どもによいとして飲ませていた。甘草だけはどうやっても家の周りでは手に入らないので、富山から薬売りが回ってくるときに購入していたが、安いものではなかった。肩がこれば切って血を出したり（「汚血を抜く」と言った）、灸をたくさんすえて治した。これは体が温まるので妊婦にもよく行われていたようである。灸に使うのはヨモギの草で、夏至までに刈り取ったヨモギを乾燥させてためておき、必要に応じて揉んで使った。夏至を過ぎたヨモギは呆けるといって敬遠された。

冬は誕生という喜びの季節でもあり、死が近くなる季節でもあった。万一妊婦が体調を崩したり、急病人が出たりしても、まず診察を受けることはかなわない。田渕氏によると、夏の間ですら「道が本当に悪いですで、まむしに咬まれたらかなわんからと、前に二人、後に三人位つかんとよう行かん」（美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編、1984）といて医者拒否することが普通だったのである。冬となればなおさら

であった。

個々の住宅に電話は設置されておらず、住民は1963年から熱田分校に設置された部落電話（農村公衆電話）を共同で使用していた。個人的な要件での利用はもちろん、地域局や役場からの連絡も全てがこの電話によって行われており、冬季の生命線とも呼ぶべき存在であった。しかしこの電話によって出稼ぎ者に危篤が伝えられても、熱田に帰りつくまでにはかなりの時間を要するため、死に目にあえないことも多かったという。第3章で述べた若者の教育・下宿問題と相まって、住民の間にはじんわりと、「ここにいつまでも住んでおれないのでは」という意識が広がっていった。

## 10. 無住集落へ

1968年2月13日、小代全体を豪雪が襲った。しばらく外へ買い物には行けないねえ、と話していた熱田の人々のところに、役場から電話が入った。熱田出合までブルドーザーで除雪をしたから、買い物に出ようと思えば出られるというのである。「あんたがた長い間生のお魚も食べてないだろう」と気遣って、連絡してくれたのだった。さっそく皆で相談し合い、5人の女性が翌朝早くから買い出しに出かけた。そのうちの1人が田渕氏の妻であった。

「朝出かけて買い物していると、昼頃から急に雪が降りしきるようになり、これは大変だ、早く帰ろうと、秋岡で昼を食えずぐ帰りかけたのですが、その道にもものすごく雪が降り、熱田出合にお地藏さんがあるが、その川向こうに小屋があって、そこまで帰るのに5時ごろまでかかったようです。」（田渕談、美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編、1984）

「小屋が1つあって、そこに泊まろうかってだいぶ思案したらしいけど、牛も飼ってるし年寄りも



おるし、ここまで帰ったらなんとかしてってことで、前の人たちが雪を少しづつかき分けながら、交代で交代でして。うちの家内がそれこそ一番真っ先に歩きよって。けどももうこのへんで変わろうかってことで、家内が一番おしまいになっただけです。そこでいわゆる表層雪崩っていうのがガガーって来ましてね。そうした時にはうちの家内だけがここまで（胸まで）埋まって、後の人はみんな雪に埋もれとったけども、まだうちの家内の前の人、人間が立ちいっとるとこへ来たんだで、ちょっと高いでここ掘ったら出てくるってことで。一番先頭を歩いとった人だけは、どないにも皆で探したけど出なんだと。」（田淵）

4 人は分校まで這いあがると、熱田分校に泊まっていた先生に事情を話して 110 番を要請した。当時田淵氏は八鹿（現在の養父市）へ酒造りに出ているが、一緒に出稼ぎに来ていた男性が行方不明になった女性の夫だったため、事故の発生をいち早く知ることになった。酒屋の主人に秋岡まで送ってもらったものの、そこからは徒歩で向かうしかない。新聞記者と消防隊、浜坂警察本部からの応援、小代内からの一般人の応援、合わせて 60 人以上と一緒に遭難現場への行進をはじめた。にわか雪は崩れやすく、とても歩けるものではなかったが、交代で雪をかきわけながら進み、熱田出合に辿りついた時には深夜 0 時を過ぎていた。

「さあいよいよ現場に着いた時には朝の 4 時です。それでなんとか着いたけどもう駄目でした。いづれにしてもどうしたらええだろうと。っていうのも、これから熱田まで連れて帰るといってもまだまだ辛いとこ連れて帰らないとだし。まず第一、お医者に見せんことにはね。医者診断書がないわけで、どうすることもできん。お医者さんに連絡もつかんような、今の携帯でも全然届かんようなとこやけど、とても年の取ったお医者さんだし、来てくれるわけないと思うけど、どないしよう。

そのお医者さんのとこ（筆者注：城山地区にある現在の小代診療所）まで連れてって、いっそのこと焼いて骨（こつ）にして持って帰ろうかというような話がありましてね。けどそんなん言うたって、連れてってまた連れて帰れるのかな、わからんし。葬式……。焼くって言ったってそれでも、そのままあんた、言いは悪いけど着替えさせもせずそのまま焼くちゅうようなことは、親戚の人でも親や子どもらや、誰もまだ自分の家でなんにも知らずにおるのにねえ。そないなわけいかんでっていうことで、熱田まで連れて帰って、着替えさせて、ちゃんとせなちゅうことで・・・色々言っただけど、終いがたには、決断せえというわけで、とにかく連れて帰ろうって。」（田淵）

遺体は寝袋に入れられて、熱田の分校まで引き上げられた。熱田分校から医師に検死の依頼をしたものの「こんな時にあがなとこさ行ったらわしが死んじゃう。よう行かん」と言われて断られてしまった。しかし、死亡証明書がなければ埋葬許可証も出ない。さて困ったということで、まず県警に問い合わせ、最終的には東京の警視庁に電話したら「東京には離れ島がたくさんあるので、そのため医師でなくとも警部補以上の人が 2 人検死したら死亡証明としていい」ことをようやく教えてくれた。ところがその場に警部補以上の者が 1 人しかいない。翌日の朝もう 1 人警部補がやってきて、検死の後ようやく土葬ということになった。

「そのことがあって、こういうところに人間がどうでも住まにゃいかんのだろうかという話があるありましてね。で、特に男の人たちはほとんどその頃、酒屋さんのほうに出稼ぎに出ておられるし。結局あとに残るのは女の人たちと年寄り。まだ子どもが分校にありましたから先生も来られたんですけど、もうこの機会にいっそのこと集団で、ってことを県のほうから言われましてですね。年のとった人たちはせめて 1 年待ってくれえや、



おらが死んでからにしてくれえやって言われたんですけどね。でも県のほうも必ず全部部落が固まって出てこないと困るということで。」(田淵)

そして熱田は1969年の12月25日、事実上の無住集落となった。

## 11. おわりに

「無住集落」。この言葉から人は何を連想するだろう。「誰も人が住んでいない集落」。その通りである。しかし、熱田に暮らしてきた人々は確かに歴史の一端を担い、今もなお土地を形作っている。主観的ではあるが、田淵家の墓前に立って、「この土地に骨を埋めた数えきれない人々」の存在を周囲に感じた時に足元から這い上った戦慄を、我々はどうしても忘れることができない。

死は、どのような生き物にも必ずやってくる。しかしその中で、葬儀を行い、墓まで建てるのは、人間くらいではないだろうか。今回、熱田の文化を知るにあたって、切り口を葬送儀礼としたのは、この点を非常に面白く感じていたからである。

田淵氏は、「墓は土地と人をつなぐ最後の砦だ」と語った。その墓自体が失われていく現状を目の当たりにすると、墓とは単なるモニュメントではなく家や地域の変容を映す鏡であると再認識せざるを得ない。ならば集落の死とは、すべての墓が失われ、土地から人間が消えることをいうのだろうか。きっとそうではないだろう。

「人がいなくなったからって、その辺のもの全部つぶせなんていうのはおかしい。本当は自分たちはいつまででも、ずっとそこに住もうという気持ちでいたわけだね。」(田淵)

集落は人が寄り集まってできた集合体である。ならば幕引きはその全員が納得する形で行われなければならない。熱田と関わってきた人々が全て失われるまでは、本当の意味で熱田が消滅することはないだろう。

ただ、この先、熱田での暮らしを知る人々が誰

もいなくなる可能性を考えると、我々が墓石代わりになって少しでも記録を後世に残しておきたいと考えるのである。

## 引用文献

河本大地(2011a):「地域多様性」概念から見える農村地域の価値と生き方—「都市農村交流」再考一、地域地理研究、17-1、86-92

河本大地(2011b):ジオツーリズムと地理学発「地域多様性」概念—「ジオ」の視点を持続的地域社会づくりに生かすために—、地学雑誌、120-5、775-785

嶋根克己・玉川貴子(2011):戦後日本における葬儀と葬祭業の展開、専修人間科学論集 社会学篇、1、93-105

但馬学研究会:但馬牛と但馬杜氏の里(1990年11月例会報告)

[http://www.tajimagaku.net/houkoku/90/mikata\\_9011-usikai.html](http://www.tajimagaku.net/houkoku/90/mikata_9011-usikai.html) (最終閲覧日:2012年2月29日)

常光 徹(2006):「しぐさの民俗学—呪術的世界と心性—」、ミネルヴァ書房

兵庫県教育委員会文化課編(1970):小代地区民俗資料緊急調査報告書、兵庫県教育委員会

美方町史編纂委員会(1980):「美方町史」、美方町

美方町文化財審議委員会(1982):「美方町の文化財 第7集 通過儀礼」美方町文化財審議委員会

美方町文化財審議委員会(1985):「美方町の文化財 第10集 小字と通称」美方町文化財審議委員会

美方町4Hクラブ・美方町農家高齢者生きがい活動推進協議会・美方町産業課・浜坂農業改良普及所編(1984):「おじろに生きる—農山漁村高齢者生きがい充実特別事業農家高齢者生活誌—」、浜坂農業改良普及所

柳田邦夫(1977):「妖怪談義」、講談社